





# “GREEN” CONTENTS

## ○小説

- ・アオノミズホ ..... p. 02
- ・秋陽 ..... p. 08
- ・かめやま禅 ..... p. 12
- ・KUKO ..... p. 23
- ・千代崎 ..... p. 34
- ・とうみさな ..... p. 39
- ・もちみ ..... p. 41
- ・來花 ..... p. 44

## ○イラスト

- ・しまし ..... 表紙・p. 11・43・52
- ・千代崎 ..... p. 38
- ・悠汰 ..... p. 22

## ○コメント

- ..... p. 56

## いつでもそこにある

### アオノミズホ

悟浄に運転を代わってもらってどれぐらいが経つだろう。十分、いや十五分といったところか。

見慣れない助手席からの眺めに違和感を覚えながら、ずれた毛布を直した。砂漠の夜は冷える。知識としては知っていたが、ここまで差があるとは思わなかった。昼間の日差しの強さが嘘のような空気の冷たさ。それでもこの時期にしては暖かい方だと、出発前におさげの女の子が教えてくれた。

乾ききった、砂の混じった風が肌をざらつかせる。シャワーを浴びたくなるが、ここでは贅沢な望みになつてしまふ。

悟浄はただ前を見てハンドルを握っている。時折コンパスを見て方向を確認したり、煙草をくわえ直すだけのその横顔は、年齢よりも落ち着いて見えた。昼間悟空と騒々しく喧嘩したり、三蔵——今は不在のリーダー——をからか

う様とは別人のようだ。

（賑やかなところもこの人の一面でしようけれど、こっちの方が素のような気がしますね）

なぜなら自分と二人きりのときはあまり口数が多くないから。と言ったら厚かましいと笑われてしまうだろうか？それでも意見を変える気はないのだけれど。

「……起きてるか？」

運転を交代してから初めて悟浄が口を開いた。

「落ち着かないんですよね、助手席は」

「二時間おきに交代つったのお前じゃねーの」

「まだ目的地までは結構かかりそうですからね。でも運転してる貴方を見るのは楽しいから、これはこれでいいですよ」

「寝てろつつーのに……っておい、ちよつと揺れるから気をつけろ」

返事をするよりも早く、大きな振動が来た。同時に何か固い物を踏み越えたような、鈍く耳障りな音がした。

「でっかい石みてえのがあつて。避けられりゃ良かったん

「ただよ、直前まで気付かなかったわ」

「大丈夫ですよ。ジープのライトしか光源がないんですから無理ありません」

月は明るい、荒野の障害物を照らしてくれる程ではない。

「ジープ、驚かせてすみませんね」

声をかけながら車体を撫でると、キュー、と元気そうな返事が返ってきた。良かった。まだまだ水場までは頑張ってもらわなくてはならないが、この分なら大丈夫そうだ。

到着したら干し肉でもあげてねぎらつてあげなくては。

「八戒の運転じゃねーから嫌かもしれないけど、ちよつとばかり我慢してくれよ。ご主人様も疲れちゃうからね」

「……キュー……」

「すつげー渋々って感じだなおい」

「まあまあ、ここでジープにへソ曲げられたら僕らが困っちゃいますよ」

「そりやそうだけだよー、扱いに差があり過ぎんだつつの」

悟浄のぼやきをなだめながら、僕は座席のシートを後ろにずらした。背もたれに体重を預け、首を伸ばしながら夜空を仰ぐと、月を囲うように星が輝いていた。

悟浄の運転は心地良い。大雑把なように見えて案外繊細でスピードを出し過ぎることもない。やむを得ず急ブレーキをかけたり、先程のように大きく揺れる場合は必ず一声かけてくれる。

「運転に性格が出るって言いますけど、貴方の場合は結構当たってますよね」

「ハンドルさばきが華麗なイイ男つーことだろ？」

「あはは、そういう事にしておいてあげます」

冗談めかして肯定したが、本当に安心して乗っていただけるのだ。気を緩めていられる。今は気を使わないでいいと思わせてくれる。悟浄が何者かに襲われて三蔵がいなくなつて——話すべきことは色々あるはずなのに、ただこの心地良い空気を味わっていたくなってしまう。

（困ったなあ）

この人のこういう空気はずるい。多分どうやっても敵わ

ない。ちよつと腹が立つぐらいだ。

すると悟浄が茶化すように言ってきた。

「お前もモロ性格出るよなー」

「そうですか？」

「普段はまあ丁寧っちゃ丁寧だけどよ、細かいところが雑つつか。いきなりスピード上げた後に「トバすんで気をつけて下さいね」とか、トバす前に言わなきゃ意味ねえだろって」

「僕だって丁寧にアナウンスできるならしたいですけどね、毎日毎日何時間も運転してればそんなに細かいことまで気が回らなくなるんですよ。仕方ないでしょう」

「旅に出る前の運転だって似たようなもんだっただろうが」

「心外ですね。じゃあジープに聞いてみましょうか。ねえジープ、そんなに雑でしたか？」

「そりゃ卑怯だろー。ご主人様の肩持つに決まってんじゃねえか」

悟浄の抗議は特に気にせず、さっきと同じように車体を撫でた。

しかし、一分ほど待っても反応はなかった。

「……どうして何も言わないんです？」

「お前声が怖い。おーいジープ、俺はお前の正直さに感動したけど、適当にゴマすっておいた方がいいぜー」

悟浄のよく分からないアドバイスは放っておいて、僕は毅然と宣言した。

「この件は保留にしましょう」

お前ホンつと負けず嫌いよね、と呆れた風に笑われた。

（旅に出る前か）

二人であの家に住んでいた頃。三蔵の依頼を受け、ジープに乗って厄介事を解決しに行つて、報酬の安さに文句を言っていた頃。そう前ではないはずなのに、随分懐かしく思えるから不思議だ。

「悟空は運転したら上手そうですね」

「あの猿にブレーキとアクセルの違いが覚えられつかあ？無理だろ百パー。発進しようとしてバックするに決まってる」

「お箸を持つ方がアクセル、お茶碗を持つ方がブレーキと教えればきつと大丈夫ですよ。でも三蔵は……」

「……」

今はいないリーダーの名前を出した途端、悟浄の眉間にしわが寄る。

悟空を放って行った三蔵を咎める気持ちは分からなくはない。でも僕はあまり賛同する気にはなれなかった。突然、何の前触れもなく大切な物が失われそうになったとき、人は不可解で理不尽な行動を取る。その事を僕はよく知っていたから。

悟浄を横目で見ると、空き缶に煙草の吸い殻を捨てようとしていた。

「悟浄」

言いながら僕が携帯灰皿を差し出すと、悟浄は面倒くさそうに受け取った。

その姿を見ながら、つい考えてしまう。あれから何度も考えた問いを。

——もしも貴方が目の前で殺されそうになったら、僕は

どうするんでしょうね。

口に出せば、縁起でもない事をと怒られてしまうだろうか。

ふとあの日の事が頭に浮かんた。貴方がいなくなった日の事が。

「貴方がカミサマを追って、いなくなった事があったでしょう」

相槌はなかったが、おそらくは話を聞いていない訳でも、この話を嫌がっている訳でもない。特に根拠はなかったがそう判断して続けた。

「それはそれは後悔したんですよ。行かせなければ良かったって。首に縄つけてでも引き止めておけば良かったって」

「……お前が言うとは本気でやりそうだからアレな」

「実際にやるなら縄じゃなくてもっと丈夫な素材にしますよ。何があっても切れないような」

そんな物があつたらどんなに良いか。冗談の体で言っているが、半分以上は本気だ。

「だから再会したときは諸々の後悔と苛立ちをこめて蹴っ

たんですが」

「どーりでお前の蹴りが一番痛かったわけだ」

「アジトに着く前に貴方の偽物が出てきたんで、本物かと思つてボコボコにしたんですけど、今思えばやつぱり蹴り心地がイマイチでしたね。本物の方が活きがいいつていうか」

「俺褒められてんの？　つか偽物が気の毒になつてきたわ」

苦笑する悟浄に、僕は精一杯大げさに言つた。

「気の毒なのは僕ですよ。買い出しの荷物持ちがいなくて困りましたし、悟空の遊び相手や三蔵のストレス発散相手がない分の世話までしなくちゃならなくて」

「あーその話十回ぐらい聞いたからもう勘弁して」

「いいえ、あと三十回は言わないと気が済みません」

五十回と言いたいところを減らしてあげたのに、悟浄は心底うんざりした顔をした。やつぱり五十回は言おう。

こうしてふざけた笑い話にしても、きつとお互いに分かつている。本当に困つたことは、そんな事じゃなかった。

僕はあまり重くならないように気をつけながら、ひとりのように言つた。

「でも本当に……やつぱり嫌だなあつて思つたんですよ。貴方がいないのは」

いつからこうなつてしまつたのかは分からない。毎日一緒に居過ぎたのが良くなかつたのかもしれない。それでも手放す気はこれっぽっちも起こらないから始末に悪い。いてもらわないと困るのだ。

悟浄は僕の頭に左手をぽんと置いて、聞こえるか聞こえないかの声でワリイ、と呟いた。

「後で運転交代すんだから、そろそろ寝ろよ」

照れ隠しのつもりか、少々ぶつきらぼうな口調になつてゐる。

僕はくすりと笑いながら、悟浄の手を取つてゆつくりと観察した。見慣れた長い指。表面がざらついて乾燥しているのは、ここの乾いた風のせいだろう。ハンドクリームでもあればいいのに。悟浄はベタベタするからと嫌がるだろうが、それを無視して塗つてあげるのはきつと楽しい。

「代わりと言つてはなんですが」

「ん？」

返事を聞くとほぼ同時に、指先に軽くキスをした。

【了】

日課と化した家事をあらかた終え、茶を入れてリビングテーブルの席に腰かけ一息つく。何気なく、壁掛け時計へ目をやれば十時半をすこしすぎたところだった。

昨夜は賭場での稼ぎが良かったらしく上機嫌で朝帰りしてきた悟浄を叩き起こすにも、昼食の用意をするにもまだ時間が早い。あいにく今日は家庭教師のアルバイトの予定も入っていないので出かける支度をする必要もなく、贅沢にも持て余してしまったこの時間をどう過ごそうか八戒は思案する。先日買ったミステリー小説は結末の予想がついてしまったので読む気がしない。何もしないつてばおーつと過ごすのもたまにはいいかと思ひ始めたとき、そういえばと、最近、街で見かけた真新しい喫茶店を思い出す。

店の前を通りかかったときコーヒーのとても良い香りが

し、気になって窓から中の様子をうかがった。感じのいい初老の男性がカウンターの内側でグラスを磨いており、バーテンダーの様な服装からしておそらくはこの店のマスターなのだろう、レトロな雰囲気の内とあいまって時間の流れがガラス一枚隔てたこちらとは違うように感じた。ふと、店内の男性と視線が合った。怪しむ様子もなく穏やかな表情で会釈されたので八戒も頭を下げその日は、バイト先に行く途中だったのでそのまま立ち去った。

ちよつと行つてみたいな。悟浄には申し訳ないが起きてもらいあの喫茶店に行こう。そこで軽く昼食をとつて、ついでに街で日用品や食料品の買い足ししよう。

頭の中で大まかなプランを立てると湯呑を台所に置き悟浄の部屋へとむかう。

——コンコンコン

「悟浄、おはようございます」

この程度で起きてこないのは分かっているが一応ノックし声をかけてから中に入る。案の定、静かに身体が上下し規則的な寝息を立てていた。脱ぎっぱなしの服や乱雑にまとめられた雑誌の山、灰皿代わりにされたサイドボードの空き缶が目に入り、また小言を言わなければならないのかと思うと溜息が出る。足元に注意しながら音を立てないようにそつとベッドまで歩み寄り寝顔をのぞき込む。顔にかかる深紅の長い髪を退かすと普段浮かべている人を見たような笑みではなく、口を半開きにして安心しきった顔があらわれた。その間拔けな表情に毒気を抜かれた。

「そんな無防備でいると襲っちゃいますよ？」

「んう……うー」

悟浄は眉間にしわ寄せてうなりもぞと布団の中に潜ってしまった。その反応に八戒はクスツと小さく笑った。しかし、こうなるとこれまでの経験上しばらくの間はテコ

でも起きない。しかたなしにベッドを背もたれにしてその場に座ると、床に転がるタバコとライターが目に入り、拾いあげ気まぐれに箱から一本取りだして口に含んだ。不慣れな手つきで先端に火をつけ一度ふかしてから煙を肺に入れば軽くむせた。口内にタバコ独特の風味が残り、吐き出した煙からはほんの少し違和感を覚えたものの嗅ぎ慣れた香りがしていた。

微かな寝息しか聞こえない空間が心地いい。正確に言えば、悟浄の側だから心地いいのだろう。いつ頃からなんて忘れてしまったが、彼が自分の精神安定剤になっている自覚は親友という立ち位置になる以前からあった。そして、友人以上の感情を抱いてしまっている自分にはこの関係が時折、焦燥感を与えている自覚もある。

「いつそ、あなたを好きですと言ってしまおうか」

怖くて言えない言葉を口走ってから空しくなり苦笑いを

浮かべる。彼はどんな顔をするだろうか。

——気持ち悪いと拒絶する？

——それとも何の冗談だと言って笑い飛ばす？

どちらにしても優しい彼を困らせるに違いない。

グルグルと頭の中を回る思考を振り払うように、もう一度深く吸った。今度はむせずに吐き出すと白い煙は天井に向かって消えた。自分の気持ちもこんな風に煙にまけたらいいのにと思っていると背後から布の擦れる音がした。

「…八戒が吸ってたのか、珍しい」

寝起きの掠れた声が横から聞こえ一瞬驚き振り向くと、布団から顔を出した悟浄がまだ眠たそうな眼を擦っていた。

「お、おはようございます。一本もらいました」

悟浄はベッドから体を起こすと大きな欠伸をして半分まで短くなつた煙草を八戒の手から取り、文句を言うよりも先にそのまま美味そうに吸う。ふわりと香った紫煙からは自分が吸っていた時の違和感が消えていた。

「悟浄じゃないとその匂いはしないんですね」

「ああ？」

ぼそりと呟いた言葉に悟浄は煙草をくわえたまま意味が分からないといった感じで聞き返す。八戒は誤魔化すように微笑みながら首をふった。

「いえ、なんでもありません。それより今日はお昼にしませんか？ 良さそうなお店、見つけたんで」

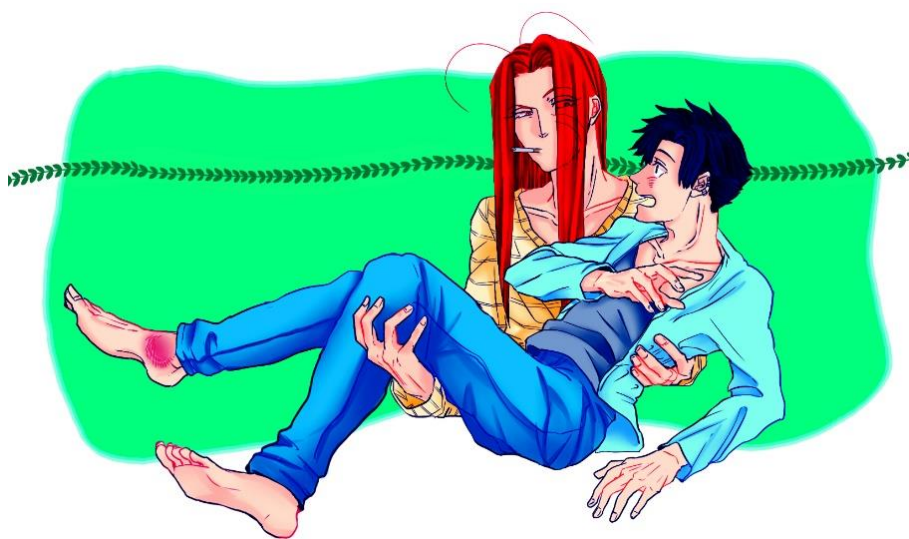
普段通りの様相で八戒は今日の予定を告げると、腰を上げサイドボードの吸い殻だらけの缶を持ちドアへ歩き出し

た。悟淨は何か言いたげに見つめるが、了承するようにヒラヒラと手を振る。その表情に気づかない八戒ではないが「じゃ後で」と言ってそそくさと部屋を出る。

「聞こえちゃったかな？」

ドアを背にバツの悪い顔をした。勘のいい人だからいつかは悟られるだろう。けれども、今はまだ、服に残る香りの主に気づかないでほしい。そう思わずにはいられなかった。

【了】



## 碧の眼の怪物

かめやま 禅

…数字にしてしまえばなんてことはない。実に単調な人生。

怪物、英語で言えば Monster

このあまりにも激しい感情が、飼いならすことのできない怪物なのだと思うってしまえば、いくらか楽になるんだろうか…

「あ、おはようございます。」

「ん…はよ。」

生まれてから二十年と少し。

生まれて初めての大恋愛をしてから五年程。

そしてその恋に破れてから二年が経ち

それはつまり悟浄と出会ってから一年が経過しようとしているということ。

大罪人・猪悟浄が殺害した妖怪は千人に上り——なんて、まるでどこかの企業の赤字を計上しているように感じる。

でも確かに、この手は血に塗れていて。

それは確かに唯一愛したヒトのため…だったのだけ。

「あ、そだ。起き抜けいきなして悪いんだけど、今日夜遅くなつから。」

もう昼と呼んでも差し支えない時刻に起きだしてきた悟浄は、テーブルにつくなり煙草を取り出しながら、何でもないことのように切り出した。

「…起き抜けなのはあなただけなので大丈夫です。」

「ん。…いや、そうじゃなくて」

「夜ですね。分かりました。ちゃんと稼いできてくださいよ。」

「うーす。」

ここ一年程の「いつもの朝」のように、自然に振る舞えていたのだろうか。

悟浄に拾われて、生活スタイル正反対な二人が紆余曲折を経て、お互いに心地よい場所に収まって。

それでこれから先は、平和に日々が続いて、悟浄が結婚するとかいう運びになるまでは、なんとなくこのままでいいかなあ、と思っていたのに。

「あつれ、煙草あと二本しかねえや。」

悟浄の手指に挟まれたあの煙草にまで思わず激情を向けてしまう。

「夜までもつかない。」

嫉妬という名の。

「買い置きなら、その棚の中にありますけど。」

「マジでか。準備いいのな、お前。」

「まあ、カートンで買った方がお買い得ですし。」

嘘だ。そんな理由は嘘だ。

本当は、煙草なんかの所為で悟浄が出かけてしまうのを防ぐためだ。

なのに

「おー、さすが八戒さんだこと。」

そうやって笑うのだ。その悪ぶった態度に似つかわしくない、純真な笑顔で。

その表情を見るたびに胸の奥に湧き起こる感情は、五年前とはなんだか異なっていて、でも名前を付けるなら同じ名前しか思いつかない。

こんな感情、知らない。というか認めない。

だって五年前は、こんな激情なんて伴わなかった。嫉妬なんて醜い感情。

鍋の汚れと一緒に洗い落として、排水溝に流れてしまえばいいのに。

こんなことを考えていたって関係なく、隣の悟浄は腹を空かせているだろうから、

日の光にあふれたキッチンにそぐわない濁った葛藤をしながら、それを悟浄に気取られないように平常を装って、彼の朝食を準備し始めた。

「トーストとスクランブルエッグでいいですか？ 良ければワインナーも茹でますけど。」

「ん〜じゃあ、お願い。」

「あ…コーヒー切らしてるんで、お茶でもいいですか？」  
「おう。」

この何にも執着心のない男の、特別になれたのなら。

「そういやさ。」

煙草を天井に吹き上げると、その視線のまま続けた。

「なんでお茶は緑がほとんどなのに、『茶色』つつうのはあんな土みたいな色なんだろうな。」

「…さあ、分かりかねます。」

悟浄の目の前に置いた湯呑は、ゴト、と小さな音を立てた。

「さんきゅ。なんか茶飲みながら煙草吸うとか、三蔵みてえだな。」

「そんなこと言って。緑茶は身体にいいんですよ。俗説では二日酔い予防にもなるとか。」

悟浄の口元に運ばれる濁った緑の液体。

そういえば初めて会ったとき、悟空が僕の眼を綺麗な色だと褒めてくれたつけ。

けどきつと今の僕の瞳は、あの緑茶のように濁っているに違いない。

…大量虐殺をした後より今の方が濁っているだなんて、人格を疑われる。

あ、いや。もう人間では無いけど。

一緒に食事をとって僕がミステリー小説を読み始めると、悟浄はしばらくごろごろしていたが、ふと時計を見ると突然起き上がり「やつべ、やつべ。」と呟きながら家を後にした。

もともと静かだったこの家が、家主がいなくなりさらにシンと静まり返ってしまった。

思わずため息がでる。

悟浄は夜遅いと言っていたから、大方帰りは朝になるだろう。

今日は早く夕ご飯をとって早く寝よう。余計なことを考えなくて済む。

そう決めてしまうと、一日は早く終わるためだけに滞りなく進んでいった。

買い物に行って、また読書の続きをして、気づいたら辺りは暗くなっている。

夕ご飯も風呂も歯磨きも済ませて、眠る準備は万端だったけど、まだちよつと寝るには早い、二十時三十分。

そういえば、昼間にか悟浄の質問に答えられなかったような…。

ああ、茶について。

本棚を探すと、ここで暮らし始めたころそろえた料理本の中に「お茶のすべて」なる本があった。なんのために買ったんだか。

電球が暗い自分の部屋から本を持って、ダイニングテーブルで本を読み始めた。

「なるほど。昔は茶色い番茶が主流で…」

呟いてみたところで、響くのは自分の声だけ。

悟浄は今どうしているだろうか。

いつもみたいに賭場で派手に遊んでいるのだろうか。

僕らの生活費が、三蔵からのバイト代と賭博で稼いだお金で賄われているのだから仕方のないことなのだけど。

賭け事をしている時の彼は一段と活き活きして、自信あがりげな表情がまた…

なんて考えてしまっているのが、もう末期。

…それとも、もう十分に稼いで、どこかのお姉さんのところに時化込んでいたりして…。

あの長くて艶やかな髪を、女性の顔に垂らして乗り上げて。

「あー。——ざまあない。」

いくら冷静になろうとしても、脳は悟浄のことを考えて

は濁りだす。

「こんな時は読書ですよ。」

呟いて席を立った。「お茶のすべて」では、いささか役不足だ。

最近読んでない本で、こう、読んでるうちに疲れて寝れるような。

下の方の段の少々灼けた背表紙の本を漁っていると、唐突に目についたそれは——

「オセロ——シェイクスピア、か。」

数ページ読んで思い出した。

確か、この本にこんなようなフレーズがあった。

『嫉妬は緑の眼をした怪物である』

「Green eyed monster...でしたっけ。」

ばんっ。

突然玄関の方から物音がした。

時計を見れば〇時ちよつと前。こんなに時間が経つてたのか、でもまだ悟浄が帰ってくるには早いけど…。

玄関に行ってみるとそこには、紅いものが倒れていた。

「…悟浄？」

「もうやだー、ごじようつたら。」

声の方に目をやると、玄関の外にこれまた派手な色彩の女性が立っていた。

「あら、ここ悟浄の家よね？ 同居人？」

きつい香水の匂いを振りまきながら、その女性は僕の全身を眺めまわした。

「そうですか。」

「ごじよう今日昼間からトモダチの快気祝いとか言つてー、すつこいのんでー、あしもとふらついてたから送つてき

てあげたの。」

「そうですか。お手数おかけしました。」

不快だ。実に。

私が選ばれた特別だとも言いたげなその女性を残して、僕は紅い物体を担いで一礼して扉を閉めた。

思つてたより重い、この人。細身だけど筋肉質だしな。

——この生活がずっと続けばいいって？

けど、酒臭い。香水の甘つたるい香りも。

——冗談じゃない、こんな生活してたら、気が狂つてしまう。

僕の肩に額をつけて寝こける悟浄。…よく見ると首筋にベットリとキスマーク。

『嫉妬は、緑の眼をした怪物である』

——途端に、キタ。

「っ、うお!？」

「なんだ、起きちゃったんですか？　ずっと寝ていても良かったのに。」

「いや、てか何事よ!」

悟浄が起きるのも無理もない。

なんせ、彼のベッドに投げ込んで差し上げたのだから。

そして、悟浄が狼狽えても仕方ない。

なぜなら、同居人に馬乗りで首を握られているのだから。

「彼女の…花喃のときですら、こんなこと思わなかった。」

「…は？」

「この手で、永遠に自分だけのものにしたいだなんて!」

「ぐっ…は、か…」

首に添えた手はそのままに、重心を前に傾けると、悟浄の表情が歪んだ。

「誰にも触れさせたくない、んです。」

僕は人間から人ならざる者に変貌を遂げたけど

「僕以外のものを、その瞳に映してほしくないっ」

それが妖怪だつてどうして分かる？

それが緑の眼をした怪物でないなんて、どうして分かる？

「好き、なんです。あなたの事が。」

僕は嫉妬に狂った、*Green eyed monster* そのものだ。

「はっ、か…い…。」

驚いたことに、悟浄は無抵抗だった。

抵抗の代わりに、彼は手を目いっぱい伸ばして、僕の肩に触れた。

「ごめ、んな。…つき…つか、く…て。」

「えっ…？」

「ご…めん。ごめ…」

この男は…自分の置かれた状況を理解してるのだろうか？

仮に分からなくても、首が絞められていることは分かるはず。

なのにこの男は、この人は、悟浄は。

いつも他人の、心配ばかりして。

「馬鹿ですか、あなた…僕に首、絞められてるんですよ。」

悟浄は呼吸もできないくせに微笑むと、僕の背中を、つう、と一回擦った。

「わかつ…て、る…っ…の」

思わず、肘がぐくけた。

バランスを崩して、倒れ込んだのは悟浄の横。

「はあっ、すいませ…、すいませんっ！」

口をついて出たのは、謝罪の言葉。

今まで僕を覆っていた濁った激情が、嘘のように引いていくのが分かった。

代わりに押し寄せてくる、混乱と後悔。

…なにをしていたんだろう、僕は。

悟浄の首を絞めて、それから？

死んでしまっていたらどうするつもりだったんだろう？

まさか…一緒に？

駄目だ、顔向けできない。

僕は愛情と他の感情の区別さえつかない。

ベッドに顔を伏せていると、横で起き上がった気配がし

た。

「つはあ……おい、大丈夫か？」

命の危機にあったのは、自分だつていうのに。  
きつとこんな人だから、僕は、彼を。

「……ふう。」

返事をしない僕に耐えかねたか、足音は部屋を出ていった。  
悟浄の部屋には、僕の鳴咽だけが響いていた。

悟浄は、この家を出て行ってしまうかもしれない。

もう、終わりだ。

「おい、八戒さんよ。ちょっとこつちきてくんねえ？」

どれくらいたっただろう。声の元を見ると、悟浄が廊下から顔だけを出していた。

顔…向けてしまった。

「はーつかい。ちょい教えて。」

「…はい。」

こんなことをした動機を聞かれるだろうか。

思いながら悟浄に続いてキツチンに入ると、彼は薬缶を指さした。

「湯も沸かしてるし、急須も出した。でも、茶葉の場所がわかんなくて、さ。」

「…は？」

「いやだから、茶だよ茶。緑茶。」

「…なんでまた。」

「いやだって、アルファ波がでてリラックスがどうのこうので、血圧がひくくなるとかなんとか…」

言いよどむ悟浄の視界の先には、先ほど僕が置きっぱなしにしていた「お茶のすべて」。

「まずは二人とも落ち着いて、それから話し合うかなっつう」

なんと悠長な。だって僕は、僕は…

「僕は！ 先ほど、あなたを殺そうとしたんですよ？」

「…美人に殺されそうになったのは二回目だわ。」

だったら余計トラウマな筈だ。なのに。

「普通なら追い出すどころか、三蔵に言えば執行猶予がなくなつて刑が施行され」

「やめろ。」

「え…？」

茶漉しをシンクの中に投げ捨てて、金属同士の音がした。

「俺が拾った命なんだよ。一度失ったかと思つて、肝が冷える思ひして」

目が離せない。

紅い呪縛が一步一步近づいてくる。

「もう二度とあんな思いはしない。」

再び、肩にふれた手。

「恋愛とか、そんなんよくわかんねえよ？ でも、俺の事だけ考えてくれてたらつて、思つてた。今まで、ずっと。」

最初は何が起こつたのか分からなかった。

僕の背中で交差する悟浄の両腕。

「そんなんじゃ、ダメ？」

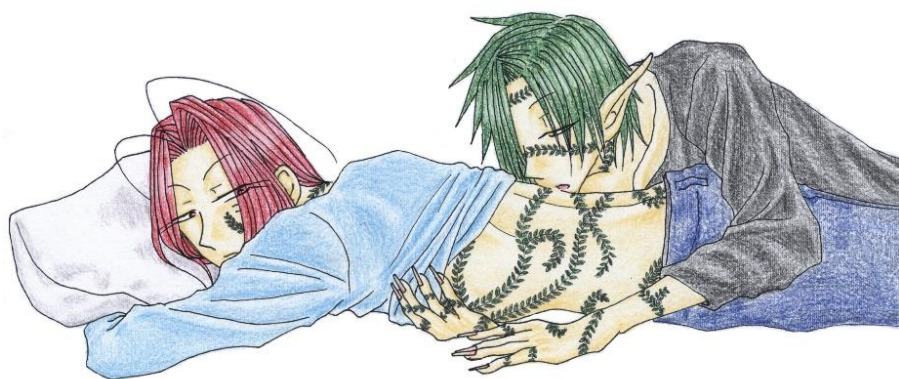
抱きしめられていた。

僕の罪を奪おうとするが如く、力強く、熱く。

「好きよ？ 八戒のこと。」

緑の眼の怪物は、緑茶がはいるのを待つ、ただの男になった。

【了】



何の気なしに視線を横に移すと、商店と商店の間、路地の向こう側を悟浄が横切ったのが見えた。

まだ日差しが強い時間。一時間程前に三人を宿に残して一人で買物に出た。両手で抱えた茶色の紙袋には、旅に必要な物がぎつしりと詰まっている。食料品、薬、三蔵と悟浄の煙草、悟浄用のお菓子などなど。野宿が続いて疲れているだろうと思ったから一人で出掛けたのに、遊びに出るなら荷物持ちくらいして欲しい。

悟浄が歩いている道に向かう。今歩いているのは中央通で、悟浄が歩いていたのは一本中に入った路地裏だ。夜間営業の店が軒を連ね、昼間はシャッターが閉まっている。その間、シャッターの前に露天商が店を出し、アクセサリや絵画、下手物料理、飴細工などを売っていた。

悟浄を見付けるのは容易い。露店の前で足を止め、何やら物色中のような。そつと近づいて声を掛けようと道の端

を進む。袋の中でお酒の瓶がぶつかってカタカタと音を立てた。重い。悟浄が何かを掴み、太陽の光に翳す。その横顔は真剣そのもので、出す牌を考えている表情と似ていた。足を早め、悟浄の名前を呼ぼうとした時、金髪の女性が悟浄の顔を覗き込んだ。

止まってしまった脚を何とか動かし物陰に隠れる。深呼吸をしてもう一度悟浄の方を見た。悟浄はまだ品物を凝視していて、女性はその腕に自分の腕を絡め肩に顔を乗せていた。女性に顔を向けた悟浄の表情は自分の方からは見えない。笑っているだろうか。優しく。それとも鼻の下をのばして。二人の雰囲気は邪魔出来るようなものではなくて、歩き去る人々が羨ましげに見る程、そこだけ色が違っていた。

中央通へ戻る。あと必要な物は裁縫道具だけだ。昨日の戦いで派手に破いた悟浄のマントを縫わなくてはいけない。悟浄が寝煙草で穴をあけたズボンも修繕しなくてはならない。そう、早く宿に帰って明日の仕度をしよう。

悟浄のことは考えない。考えたところどうしようもな

いことなのだ。緩んだ心に釘をさす。真剣な眼差しも、悩ましい表情も、僕に向けられることはないのだから。

比較的大きな街で、宿は幾つもあった。けれど、シングルルームはどこもうまっていて、仕方がなくツインルームを二つとった。くじで決めた部屋割りは三蔵と悟空、八戒と悟浄になっていた。悟浄は夕ご飯にもきつと帰ってこないだろう。夜中、ベッドにジープを休ませられるので丁度良い。

ジープのために果物でも買って帰ろうと果物屋に寄り道をする。食欲の秋を盛り立てる色とりどりの果物が並んでいた。

「梨が良いんじゃないの。綺麗な色じゃん」

横から声を掛けられる。誰かなんて顔を見なくても分かる。

(綺麗な色か)

昔そんな風に声を掛けたことがあった。別人のように髪を切った悟浄に。あの時僕は何を思っていただろう。お礼

でも言おうと思っていたのだろうか。それとも言い訳だろうか。悟浄はどうなのだろう。数分前の悟浄の姿が脳裏を過った。

「もう秋ですね。柿も出てる」

悟浄の話は無視して葡萄と柿を買う。悟浄がこれもと言つて買った梨のせいで渡された袋が倍も重くなった。足下に置いた袋を悟浄が抱えてさっさと宿に向かって歩き出す。悟浄の背中はいつともより浮かれて見える。その背中に追いつかないよう、二歩下がって歩いた。

「体調でも悪いのか」

振り向いた悟浄が僕の顔を覗く。あの女性にはどんな顔をしていたのか。そんなことを考える自分が情けなくて、悟浄の横を通り過ぎる。こういう時、悟浄の聡さが厄介だ。派手な触覚を生やしアンテナをはっているだけのことはある。「無駄遣いし過ぎたと計算していたんです」と返した。

悟浄のポケットの中には、さつき物色していた女性へのプレゼントの領収書がくしやりと丸めて入っているはずだ。悟浄が声を掛けたのはきつと言いつつ。そんな物を三仏神の

お金で買う訳にはいかないと、何度も言っているのに。

宿に戻りお風呂に入って次の日の用意をし終わっても、悟浄は部屋にいた。しばらくは悟空と遊んでいたが、随分前に眠くなったと悟空が部屋に戻った。何もすることがなく、ジッポの蓋を開けたり閉めたりしている。カチンカチンという規則正しい音が、荒立った心に突き刺さる。

(つまらないならどこへでも行ってしまうえば良いのに)

悟浄があけたズボンの穴に、当て布をして縫っていく。ズボンと同じ色の糸を買ったつもりが、少し明るかった。縫うごとにその跡が目立っていく。どこにでも行ってしまうなんて、嘘もいいところだ。

「珈琲飲むか」

「…はい」

声を押し殺し、手元に集中する。少しはこの跡がマシになるようにと。

眠りについて少し経った深夜二時。外の気配がおかしく

なった。宿の裏側は森になっていて、その向こうから妖気が迫っているのを感じる。自分達を狙っているのは明らかだ。眠っている最中なら倒せる可能性があると思っているようだが、寝起きで機嫌の悪い僕達を相手にするのはどんな時よりも危険だ。

宿から出て外で相手しようと思身支度をする。が、敵は既に宿に入り込んでいるようだ。隣の部屋の様子を確認する。物音一つしない不自然な程静まり返った気配から意図を汲む。

「結構いるな」

悟浄が言う通り、大所帯での襲撃だ。頭数だけ揃えた野良妖怪だろうか。それとも組織立って攻め入って来る牛魔王の刺客だろうか。後者ならそれなりの準備をしているだろう。

(外は僕が相手をします。悟浄は宿の中を)

(了解)

目配せで確認する。隣は三蔵が外、中が悟空だろう。遠距離戦が出来る二人が外からの攻撃を阻む間に、宿内にいる

敵を倒した近距離戦の得意な二人が外に出る。よくあるケースだ。

部屋の前扉の前に数人の妖怪がスタンバイしている。何らかの合図で一斉に中に入り込んで来るつもりだろう。同時に気を取られているうちに外から砲撃があるかもしれない。八戒は窓から見えない位置に潜んだ。

「キャアアアアア」

廊下に女性の悲鳴が響く。それが合図かのように妖怪が傾れ込んで来た。

「三蔵一行、覚悟」

妖怪が部屋に入ってくるのを後ろに感じながら窓から外を見下ろす。待機していた敵がカノン砲を撃ち、砲弾が飛んで来る。隣の窓から顔を出した三蔵が魔戒天浄を発動した。砲弾は爆発することなく空高く上がり、敵地に落下した。その後を追うように砲台に気功砲を撃ち込む。今度は物凄い爆発が起きた。夜の闇に突如明かりが灯り、辺りの様子がよく見えるようになる。煙を飛び越えて森から溢れ出す妖怪達。間髪入れず気孔砲を撃ち込んだ。

敵の動きが止まった。陣形を整えるためか、森へと撤退して行く。戦い振りから牛魔王の刺客だろうと判断した。

部屋を見ると数人の妖怪が倒れていた。息をしている者に頭数や作戦などの情報を聞き出した方がいいだろうか。目が合った妖怪に笑みを浮かべて近づいて行つた。

その時足音が部屋に迫って来た。扉を見ると、悟浄が女性に手を貸して入って来るところだった。女性を部屋の隅に座らせ、水を差し出す。渡されたコップを持つ手は可哀想な程震えている。さつき悲鳴を上げた女性だろうか。女性に上着を掛けて悟浄が話しかけている。

ドクンと心臓が鳴った。

突如二人の身体が消えた。何が起きたのかわからない。辺りが暗くなったからだと気が付いたのは三蔵の声が聞こえてからだつた。

「八戒」

窓に妖怪がいた。窓枠に乗ったことで外からの明かりが遮られたのだ。三階までどうやって登って来たのだろうか。三蔵の銃声がしたが妖怪には当たらなかった。不意打ちで

対処が出来ない。妖怪が自分に手を伸ばし窓から落とそうとする。いつもなら踏ん張れるはずの脚には力が入らなかつた。窓から上半身が出て、一気に自分の重みを感じた。

こんな時に冷静になれるのは場数を積んだおかげか。宿は三階。ちゃんと着地さえ出来れば怪我すらしない。体勢を整えるために、身をねじった。

すると、何本もの鋭い槍が地面を覆っているのが見えた。身体に衝撃が走る。痛みを耐えるために息を止め、数秒をやり過ごす。静かに息を吐き出す。激痛に身構えたが身体には叩き付けられたような衝撃の名残を感じるだけで、後頭部にしか鋭い痛みを感じなかった。

ゆっくり眼を開けると、あるはずの空は無かつた。それが宿の部屋の天井だと分かると、妖怪たちの咆哮と、銃声、物が壊れる音が耳を貫いた。横には先ほどの女性が口を大きく開けて窓を見ていた。横に悟浄はいない。立ち上がるうとすると、何かに引つ張られて地面に倒れこんだ。

鎖が身体に巻き付いて、足下の床には鎌が刺さっていた。慌てて立ち上がり窓に駆け寄る。三蔵が銃を連射してい

た。飛び出して来た妖怪達が一斉に宿に向かって走って来る。そこに悟空が飛び出して来て如意棒で蹴散らした。その悟空の後ろ。僕の真下に、悟浄がいた。

全ての敵が宿ではなく悟浄に向かっているのだと分かる。一矢報いるために一人でも倒そうと一斉攻撃を仕掛けて来たのだ。

外に出て悟浄に駆け寄る。槍は一本も身体に刺さっていなかった。槍と槍の間に身体をすっぽりと挟ませていた。が、槍の先に仕込まれた毒が、引つ掻いた傷から体内に入つたようだ。悟浄の身体が痙攣している。常備している解毒剤を飲ませ、傷口の治療を始める。悟浄は荒い呼吸を吐き続け、汗が吹き出していた。

敵を遠ざけるために三蔵と悟空が森に入った。それを心配と物音で感じる。

毒が血液を経て全身に回る。その進行を遅らせたいが、傷口が多すぎて結束のしようがない。

意識を集中しまだ塞いでいない傷口に気孔をあてる。上

手く行けば血液を浄化出来るかもしれない。

——悟浄さえ助かれば

眼を開けると木の天井が見えた。デジャブを見ているように、飛び起きて辺りを見回す。体中を震わせた女性はそこにはおらず、椅子に座った悟空が眠っていた。気孔を使い過ぎて倒れたらしい。サイドテーブルには洗面器が置かれ、膝の上には頭から落ちた冷たいタオルが乗っていた。ずつと看病してくれていたのだろう。

ベッドに身体を沈める。身体ではない、心が重い。逃げ出してしまいたい気分だが、きちんと整理しなくては隣の部屋へ行けないと思った。押し込めようとした記憶を掘り起こす。

もう手に負えない。限界だと感じていた。悟浄の隣に女性がいるのを見るのが、辛くて仕方が無い。

そう分かっていながら無視することに決めた。無視なんて出来るわけが無かったのだ。それが最悪の結果を生んだ。

あの時僕は呆然としていた。戦闘中であるのに意識は自

分の中に向き、そこに映る悟浄の姿をぼんやりと眺めていた。現実なのか夢なのか分からない。二人の姿が消えた時、舞台のスポットライトが消えたような感覚だった。

一度深呼吸をする。全身に鈍い痛みが走った。だが、そんなの悟浄に比べれば大したことはない。悟空に毛布を掛けて隣の部屋へ向かった。

部屋の扉に鍵は掛かっていなかった。夜中の戦闘で壊れてしまったらしい。ノブは付いているだけで回すことも出来ない。

中に入ると、まず三蔵が眼に入った。椅子に座って寝ていた様だが、僕が来たことで起きたらしい。顔に掛かる前髪の隙間から鋭い眼が覗いている。その眼にはきつと情けない僕の姿が映っている。

ベッドに悟浄が寝ていた。布団が上下しているのを見て、悟浄が生きていると分かった。今更脚が震え出し、その場に崩れ落ちた。

「俺は寝る。良いな」

三蔵が返事を待たずに出て行く。扉は静かに閉められた。

悟浄の所に張って行つた。ベッドの横まで行き、悟浄の顔を見ることが出来ず座っていた。三蔵が出て行く時と落とした物は、医者に処方された薬だった。解毒剤は入っていないかった。

頭に温もりを感じる。

弱々しく髪を撫でる手が心を締め付ける。

その手を握ってやっと立ち上がった。

「何考えてるんですか」

どうして一言目がこれなのか。何故悟浄を責めるのか。

悟浄は薄らと笑みを浮かべている。包帯が巻かれた左腕を出し煙草を銜える。ジッポを取り出す前にその煙草を取り上げてまっ二つに折った。

僕を守って悟浄が傷つくことが、今までにもあった。一番酷かったのは心臓の真横に種を埋め込まれた時か。あの時も悟浄は僕を責めなかった。感謝しても謝罪しても「よかったな」なんて言っていて、もうこれでおしまいと腕に腕を回し冗談を言った。そして次の日には夜の街へと消えていった。悟浄の手は蝶のように僕の手をすりぬけて、

他の女性の元へと飛んで行く。

まだ少し蒼白い顔をした悟浄の顔を一瞥し、ベッドに脚をかける。

何故責めることしか出来ないのか。責められるべきは僕なのに。悟浄が殴ってくれたら、怒鳴り散らしてくれたら、楽になれるだろうか。

悟浄の上に乗った。痛む身体に悟浄が顔を歪ませる。

今日を逃せば後がない。そう思った。二度と起こさないなんて口が裂けても言えない。もう楽になりたい。

女性に肩を貸し部屋に入って来た悟浄。大丈夫だと女性の頭に手を乗せた悟浄。女性に腕を絡められる悟浄。女性の顔を覗き込む悟浄。その全てが僕の前に壁を作り悟浄を隠していた。

頬を伝う涙を感じながら身体を倒す。もう限界なのだと視線で訴えながら。弱みに付け込むような卑怯さを罵ってくれて良い。僕を殴り飛ばしてくれば良い。僕の肩を悟浄が掴んだ。抵抗かもしれない。瞬間、出来ることなら許して欲しいと思った愚かな自分にまた涙が流れた。

数々の嫉妬を踏みつけながら、唇を寄せた。

敵襲から一週間が過ぎた。普段ならすぐさま街を出て森の中で野宿をし次の街へ移動するが、四人中二人が負傷したため身動きがとれなかった。

僕の身体には圧迫痕が走っている。悟浄の錫月杖の鎖で出来た傷だ。それも、この一週間で薄くなっていた。

三蔵と悟空は僕が悟浄の看病をしている間、一度も部屋に入って来なかった。三蔵と顔を合わせても何も言わないし、悟空に聞いても三蔵の顔を見るだけだった。三蔵は謝ることすら許してはくれなかった。

悟浄は二三日の間身体が麻痺して、喋ることも起き上がることもままならなかった。ベッドに座り普通に話せるようになった時、悟浄の態度は前と少しも変わっていなかった。僕にとつての確かな記憶は、悟浄の朦朧とした意識に夢として映ったのかもしれない。それで良かったのだと思う。気持ちちは風いで、随分楽になつていた。

夕方、身体を慣らすために街に行こうと誘われた。買い出しをする物もいくつかあったし、宿から出られなかった身体に新鮮な空気を取り入れるのも良い。

宿を出ると微かに赤くなった西の空に日常に戻ったような安心感を覚えた。

「八戒、ちよつち寄り道」

悟浄に促され横道に入る。路地裏に出ると夜の店が開店準備をし、露天商が開店作業をしている所だった。小龍包などの食欲を誘う香りが、人工的な香水の匂いと喧嘩している。

悟浄が閉店準備を進める一人の女性に声を掛けた。商売が終わって気が緩んでいたのかナンパと勘違いしたのか一度悟浄を睨んだが、知った顔だと分かり綺麗な笑顔を浮かべた。ニット帽を脱いで分かった。その女性は、あの日悟浄に腕を絡めていた金髪の女性だった。

着ている服は胸も露なピッタリのＴシャツにホットパンツ。目の前を通る男が二度見していく。

「大変だったらしいわね。敵襲にあったんでしよう。長髪

の男が槍に刺さったとか騒いでたわよ」

「それ俺ね。ま、刺さってねえけど」

女性は大きなケースを取り出すと、白い手袋を嵌めて何かを取り出し黒い布の上に置いた。

「完璧な仕上がりよ。もう日が落ちたからちゃんと見えな  
いでしょうけど。宝石は白熱灯の下で見るより太陽の光で  
見る方が好きなのよね」

そう言つて悟浄の肩に手を掛ける。この人の癖みたいだ。  
女性の言葉で、あの日悟浄が物色し引き取りに来た物が宝  
石だと分かった。露店で売る宝石には偽物も多いと聞く。  
品物を覗き込もうとすると、女性が体を割り込まして遮つ  
た。

「それを選んだ理由は分かったけどねえ」

そう言つて僕の眼を覗き込む。怪しげに光る瞳は僕の思  
考を見透かしているようで、曖昧な笑みを返して受け流し  
た。

「ありがとな。この前の金額で平気か」

「悟浄…」

「前の街で一発当てたんだよ。大丈夫、領収書なんて出さ  
ねえから」

悟浄は女性に礼を言い、僕も礼を言つて離れた。指輪を  
送る相手がいることは、ショックではなかった。もう終わ  
つたのだと、感慨に耽るくらいだ。

悟浄は宿とは反対の方向に歩き出した。

「どこに行くんですか」

振り向いた悟浄が僕の手を取る。結果、悟浄に密着して  
歩くことになった。悟浄の髪が夜風に巻き上げられ僕の頬  
を撫でる。

驚きと、悟浄の体温を感じる右半身に、鼓動が早くなる。

けれど昔からこういう人だ。スキんシップが多くて、すぐ  
に手が出る。一々反応していた自分が悪いのだと、おかし  
くなった。

反射的に熱くなった身体は、あつという間に昇った月を  
流れる夜風に冷まされた。もう大丈夫だ。

着いた先は川辺だった。街から西の位置。まだ来たこと  
の無い場所。

「さっきの姉ちゃんに聞いたんだよ。良い場所があるってさ」

悟浄に促され隣に腰を下ろす。川面に月が映つて揺れている。手が届きそうで届かない、弓張月。

「はいよ」

「え？ 何ですか」

悟浄に手を取られる。訳が分からず悟浄の顔を見る。久し振りにしっかりと見た、悟浄の顔。目は合っていない。けれど、真剣な眼差しの上に僕の手がある。そう思うと、簡単に僕の心は荒れ出した。手を引き、身体を離れた。水月を見つめ唇を噛みしめる。

「ちゃんと見ろよ」

目の前に出された、左手。その、薬指。

光を反射して輝く緑色の石が嵌められた指輪があった。

「クロム・グリーン・スフェーンというんだってさ」

悟浄の声を遠くで聞きながら、嵌められた指輪を見つめる。何のつもりだろう。深い緑の中に赤い模様が移動する。手を動かすと見え方が変わった。リングには細かく蔦のデ

ザインが刻まれていた。今直ぐに指輪を外して悟浄に返すべきだ。分かっているけど目が離せなかった。

逃げるように飛び回る赤色は、悟浄という蝶が舞っているようだった。

「スフェーン…。名前の由来は結晶の形がくさび形をしているから。ダイヤモンドを凌ぐ分散率で圧倒的な美しさを持ちながら、強度が低いために宝石としての実用性は低い。緑色にファイアの赤やオレンジが瞬く」

「何だ、知ってたのかよ」

「悲運の石…ですよね」

「あ？」

自らの結晶がくさび形。くさび形であるはずなのに、多少の衝撃で自らが傷ついてしまう。宝石として身につけられないために認知度が低い。これだけ綺麗なのに。輝いているのに。

「誕生日だからやったわけじゃねえよ、それ」

悟浄が僕の顔を覗き込む。その瞳は揺れることなくまっすぐと僕の眼を見つめている。

悟浄が指輪を撫でた。僕の眼から逃げて行く赤のファイアは、スフェーンの緑に抱えられ包まれて、外へ出て行くことは決して出来ない。どんなに傷つきやすくとも。どんなに強引でも。この緑色の宝石は、赤を手放さない。

「じゃあ何のためですか」

声が震えた。

悟浄の瞳に僕が映っている。僕が楽になるには、どんな手を使ってでも悟浄を手に入れるしかないのだと思った。その考えはすつと心に落ちて、悟浄への想いを仕舞い込んだ箱に楔を打ち込む。

悟浄の手はまだ指輪に触れている。その手を取って指を絡ませる。悟浄はやはり笑っていた。僕の眼を覗くだけで、何も言わない。もう身体の傷は治っている。嫌なら押しのけるはずだ。躲すことなんて手慣れている。なら…

「悟浄。あなたが好きです」

もう後戻りは出来ない。

悟浄が知り得ない苦悩の数々を全身に乗せて押し倒す。下唇を噛めば、悟浄の腕が背中に戻った。

「俺も」という囁く声が聞こえる。

これからも色々なことに嫉妬し続けるのだろう。それでも、目の前に悟浄がいて触れている。考える必要はなかった。あとは互いに想いのまま流されるだけだ。

もう一生手放さない。左手の薬指に感じる重み。スフェーンの緑のように。

【了】

## その夜をこえて

千代崎

「悟浄、おはよう」

ひらけたばかりの視界の端で、黒髪がさらりと揺れる。

「……」さいます」

ぼそりと言葉が継がれて漸く、柔らかな声が自分にかけてられたものだと思つた。

「ていうかお早くないですね。もう昼前ですよ」

ちらと横を見やればシーツの上には組まれた腕がある。そうやってこちらを覗き込むような姿勢で、声の主はベッドの脇に座り込んでいたらしい。俺が起きるのをずっと傍で待つてましたと言わんばかりに。視線を軽く上にやれば、幾許もなく目と目が合った。

「……ん」

左眼だけにほんの一瞬、違う色の光がちらつく。つい昨夜に薄闇の中で垣間見た、「妖怪」の眼。猫みたいに鋭く細まった瞳孔と燦んだ琥珀の虹彩が、不思議なほど目の奥

に焼きついて離れない。

瞬きして、丸っこい両の黒目をじつと見比べる。——そういえば、右眼のほうには何も変化がなかった。意識して見たこともなかったが、目の前のそれは神経こそ繋がってあれど生まれつきの眼とは違う。

「……やつぱり変ですか？」

視線に気づいたららしい八戒が右眼を指差して苦笑する。

「や、逆。全然わかんねーなって」

「殆ど見えてはいないんですね」

こうやって癖みたいに目を細めて笑うのも、義眼を凝視されたくないからか。それともただのコイツの性分か。

「よく見れば分かると思いますよ。眼球の動きとか、瞳孔の収縮とか」

言われるままに中心辺りを見比べてみると、なるほど確かに違う。暗い所に居るほど拡がるんだったか。陽の光を遮った薄暗い部屋の中では、左眼の瞳孔が心持ち大きく見えた。義眼は多分、明るい場所で自然に見えるように造られているんだろうから。

「……ふうん」

この色も、形も、元々八戒が持っていたものじゃない。  
人の手でそれらしく造られたものだと、今更は  
つきり理解した。

「不便じゃね？」

「まあ、多少は」

慣れましたけど、とまた緩く細められる眼を、少し頭を  
退いて見比べる。やっぱり遠目には全然わからない。普段  
気にかからないわけだ。

「ところで悟浄」

「あ？」

両眼がずいど迫ってくる。というか身体そのものが近  
い。いつの間にすっかりベッドに乗り上げられたのか。

「……そんな熱烈に見つめられると流石に照れるんですけど、自覚あります？」

「ッ！」

我に返って目を逸らす。眼ばかり、しかも間違いない探し  
みたいに注視してるもんだから気づきもしなかった。

「……早く言えつーの……」

「珍しいなあと思つて」

首に腕を回され、嬉しそうに上気した頬が更に寄せられ  
る。やけに活き活きした眼がまっすぐ向けられる。すかさ  
ず躲して絡みつく脚に蹴りを入れると、不機嫌そうな溜め  
息が洩れた。

「……ほら。こつちがするとすぐ逃げちゃうんですから」

「、」

ぐい、と両手の親指で下脛を押し下げられ、いきなり唇  
を奪われた。

二度、三度、と角度を変えて押しつけられる間、閉じよ  
うのない視界は強制的にドアップの目に埋め尽くされる。  
すぐに離れると八戒はまた、嫌味らしく爽やかに笑んで  
尋ねた。

「これだけ近ければ分かります？」

「分かるか！」

近すぎて比べようもない。そもそも目が乾いてそれどこ  
ろじゃない。

臉を押さえて呻く間にも、油断も隙もなく八戒の手は動く。タンクトップの裾をすりぬけた勢いのまま、腹のあたりを撫でさする。

それだけで言わんとすること、もとい、やらんとすることとはほぼ間違いなく分かる訳で。

「……なんで今」

「お昼まで半端に時間もありますから」

「イヤ疲れてんだけど」

「僕のほうはまだしも、貴方は自業自得で縛られて殴られて転がってただけじゃないですか」

「ッだから、」

助けてくれなんて言ってねえ。抗議しかけたところで、責めるみたいに縄の痕を辿られて言葉に詰まった。そんな俺を嘲ってか八戒はますます頬を寄せて、耳元へ止めを刺しにかかる。

「……それに、元気でしょう？」

「……」

何を言いたいんだか分かるから言い返せない。

厄介事から逃れて一息ついた後は、全身の倦怠感に反してアレが昂ぶことがある。仕組みなんざ知ったこっちゃないが、本能だか何だかのせいだ、多分。しかも性質の悪いことに、指摘されると余計気になるっていうか最早そっちにしか意識が行かなくなつて——どーでもいいか、もう。

ひとつ溜息を吐いて身体のを抜けば、察したように八戒が肩を押さえ込んで跨った。そのまま、と請う声に大人しく唇を少し開く。瞬きもできなくされるよりはマシだ。間近で見ると、陰になって色は暗く見えた。その上につすらと、睫毛の影も落ちている。唇が合わさったところで、数度の瞬き。白目に薄く走る血管は、義眼のほうが変わらしく浮き上がって見える。

不意にぬるりと這入りこんだ舌に反射で目を瞑った。応えて向こう側に息を逃がしながら、徐に臉を開く。殆ど同時に開かれた目と、ぴったりに視線がかち合った。そこで漸く気づく。鮮やかな青緑の中に、薄く薄く——紅が映り込んでいた。

ゆるりと舌がほどかれて、外へと引き抜かれる。温い吐息がぶつかり合う距離のまま、八戒が独り言のように言った。

「……今更、不便とは感じませんけど。そうですね、こうやって間近で貴方の両眼をまつすぐ見られないのが」

俺の左頬を撫でながら、眉尻を下げてどこか気弱に笑う。

「ほんのちよつと、惜しいです」

生きてはいない筈の瞳が一瞬、哀しげに揺れて見えた。

「……でもまあ、後悔はしないことにしましたから」

眼球を抉り出したことを。そこまで自分を追いつめた罪を。結果的に手に入れた力を、それで俺を助けたことを。

今までの全部を？

「八戒」

「はい」

何が言いたくて名前を呼んだのか、自分でも分からなかった。取り繕うように口をついた言葉もまた、妙に途切れがちだ。

「違い、さ。他にも分かった」

「へえ、どういう？」

「なんつーの。反射？ 明るさつーか光り方がさ、違エなつて」

透明の膜を張る青緑に、紅をかぶせて生まれる濃灰。片方では深く暗く影が落ち、もう片方では濡れた眼の中に留まる光が闇を透かす。

別に、どっちが綺麗とか正しいとかって訳でもなくて。

生まれ持った眼の上にも造られた眼の上にも、そこできか生まれない色とか光があるのかもしれない。——その両方を持つなんてのは、そうそうないことだと思う。

そんなことを思いつくままに呟いてみたら、八戒は暫し両目をぱちくりさせた。そのうちに口の端が綻んで、「そうですか」なんて小さな声が隙間から零れ落ちた。

少しだけ、その両眼が潤んだように見えたのは気のせい  
か。

「……そーいやさ、端っからやる気で俺が起きんの待ち構えてたワケ？」

そんな身も蓋もない、と咎める調子で言ってから八戒は、深く溜息を吐いた。俺というより自分自身に呆れ果てている、そんな具合に。

「……堪らないとか、思っちゃったんでしょねえ、多分」

「何がよ」

「自業自得で縛られて殴られて転がってた貴方が」

言い切ると同時に、長い指がまた首筋をとらえる。

その夜をこえた八戒の眼は、今までよりずっと吹っ切れてまっすぐで、良くも悪くも遠慮がなくて。広告写真の海みたいな色にそぐわない、熱と獐犢さを持っていて。

「……ッは、サイテー」

ただ、その真ん中に紅を混ぜながら。泳ぎ方も知らない子供みたいに、どぷりと身体を沈めてゆく。

【了】



なんだア？ 俺んトコくるなんて珍しいな。

アイツは？ あ、まだ風呂か。

……サシミ食う？ ほらよ。

それにしてもアイツ風呂好きだよな。俺なんてぬるいのにずっと浸かっているとかムリなだけだ。

そういや、おまえが来る前の話なんだけども。

その日荷物運び手伝えーとかなんとかで三蔵サマに呼び出しくらってよ。んで病み上がりなアイツ置いて俺一人で行ったワケ。

……帰ってきたら誰もいねーの。……なのに水滴の音だけ聞こえて超ビビった。

アイツの名前すげーでかい声で叫んじまったよ。

倒れてるのかって思って、で、急いで探すじゃん？

どこにいたかって？

アイツ、本にビニールかけて持ってきて、頭にタオル巻いて、ジャスミンティーを蓋の上にのせて……のんびり半身浴してやがんの。

タイルなんて光を反射させるくれーに磨かれてさ、確か抹茶の入浴剤も使ってたな。ウチの狭い風呂がセラブ空間になってたぜ。

んで、アイツ何て言ったと思う？

「ああ、おかえりなさい……一緒に入りますか？」

心配して損したつつか。ひょーしぬけ。俺しばらく風呂の扉開いたまま突っ立ってた。

一緒に……。もしかしたら逆上してたのかもな。ほんのり顔紅かったし。

さて、と。風呂上がりだし何か飲むだろ。ポットでも用意してやるか。あ、でも茶アよりビールのほうがイイか？

おまえはどうする？ 酒は飲めねーよな？ チー鱈喰う？

明日の為に先に寝る？ 真面目だなー。

あ、アイツの運転粗かったら今のうちに言えよ？ なーんてな。

ンじゃ、明日もよろしく。オヤスミ。

【了】

## 彼の居るぬるま湯

もちみ

僕が握っている鋭利なソレは簡単に彼の首を切り裂ける位置にある。手を滑らせれば大量の血飛沫が上がることだろう。しかし、背を向けたままの彼は万が一にも自分の首が狙われるとは思っていない。もちろん僕の方にもそんなつもりは毛頭ない。が、かつて大勢の人々を殺めた事実は決して消えることはないのだ。絶対に何もするわけがないと信頼することが本当にできるのだろうか。粘着質な赤い液体が染め上げたこの手に触れられても嫌悪感を抱いたりしないのだろうか。

そんなことに思考回路は傾いたまま、彼の項を通り過ぎた刃物を綺麗な紅い髪へと向ける。

そう、今は悟浄の散髪をしている最中だ。刃物というには心許ないただの鋏で彼の細い髪を切りそろえていく。

「ちょっと無防備すぎやしませんか？」

「んー？ ナニが？」

パラパラと雑誌をめくるその姿には警戒心の欠片もない。

「今の貴方は刃物を持った大量殺人鬼に後ろをとられてるんですよ？」

こんなことを言ったらどんな反応をするだろうか。

雑誌をめくる手が止まり、溜め息を吐かれる。鋏を動かすのをやめて言葉を待っていると、座ったまま上を向いた彼が僕と目を合わせた。

「なーによ、ネガティブ入ってんの？」

「ネガティブですか？」

「ネガティブだろうが。」

こおんなに皺寄せやがって、と腕を伸ばして僕の眉間をグリグリと押してくる。自分では普通の顔をして笑顔すら浮かべていたつもりでも、この人にはすぐにバレてしまう。本当に他人のことに關しては鋭い。

「怖くありませんか？」

僕の犯した罪が。真つ赤な手が。僕自身が。

「怖い」と言われることが怖いのに、聞かずにはいられない

くて目まぐるしく回る思考。確かにこれはネガティブかもしれない。なんだか居たたまれない気持ちになって、そつと目を伏せた。

「べえーつにいいー」

さも興味ないという風に返され、安堵の息を吐く。ゆっくりと目を開けば、口の端を釣り上げて悪戯っぽく笑う顔。

「殺されても本望！　つてくらいお前のこと愛しちゃつてんのよ」

「なに、言ってるんですか…」

いくら平静を装ってみても内心焦っていることはお見通しなんだろう。照れているのを誤魔化すように苦笑する僕の首に彼の腕が回された。そのまま引き寄せられて、唇が触れ合う。

「お前の手はさ、俺のことを悦ばせるためのモンだから」

まるで夜の営みを連想させるその文言。

「誘ってます？」

「違えよ」

カラカラと楽しげに笑う顔が、やはりこの人には敵わないと思わせる。細められた紅い瞳は優しい光を灯していた。

「あんま細けえコト気にしてんなよ？」

「はい」

こんなに簡単に悟淨曰くネガティブな僕の思考は払拭されてしまう。

僕の犯した罪は消えない。でも、真つ赤な手は洗い流せるし、僕自身も確実に変わってきている。そう丸め込まれた気がするがそれも悪くない。このぬるま湯に浸かっているのはとても心地良いから。

散髪の続きをしようと鉢を持ち上げて見せると察した彼が前を向く。再び細く綺麗な髪に鉢を入れると機嫌良さげな鼻歌が聞こえてきた。

「髪、ゆるふわにしてもいいですか？」

「んー…。好きにすれば？」

「動くとやけどしますからね？」  
「…おう」

【了】



## 焦らす

### 來花

悟浄の無神経さに僕の心は掻き乱される。

よく、眠る人だなあ。と思いつながら眉間に皺が寄った寝顔を見下ろす。確か昨日は日付が変わる頃に帰ってきて、僕の作ったご飯を食べて眠りについたはず。その時点で一時を超えていたんだけど今はその時計の短針が一周回ったお昼過ぎ。約十二時間も眠っているわけですが。本当によく眠る。

それが、今日のお昼の話。最近の僕は日が変わる前や悟浄が返ってくる前に部屋に引っこんでしまう。なんでもかって、そりやお酒を飲んで帰ってきた悟浄の色気に当てられて事に及んでしまわないようにと気を付けるためだ。

あの人は気づいていない。自分が持つフェロモンに。お酒が入ることによって紅潮した頬に、僕だけだといいの、なんて思うほどに油断した表情で微笑むから本当に押し倒したくなる。

今日も、今日とて先に部屋に引っこんでしまおうかと思つた矢先に玄関が荒々しく開かれる。その乱暴さに悟浄が帰ってきたんだと知る。今日は会ってしまった。

無言で部屋に入ってきた悟浄の頬は紅い。随分と飲んできたようだ。これは悪酔いしてそうだなあ…。

「八戒がいる…」

「ええ、お帰りなさい」

「タダイマ」

帰ってきた悟浄に差し出したのはコップ一杯の水だ。これで少しでも酔いが醒めてくれたらと願う。

「晩御飯、どうします？」

「ん…食べる」

こんなに早く帰ってくるということはそんなにつまみも食べてないんじゃないだろうか。でもその代わりにお酒はたくさん飲んでいそうですね。再び僕はキッチンに行つて料理を温め直す。

悟浄は僕の料理をおいしいと言って食べてくれる。同居して二年経った今では悟浄は僕が机に置いておいたメモ書きに一言、残して行ってくれる。それを次の日の朝に読むことがどれだけ僕の楽しみになったことか。

「……悟浄？」

ふと、悟浄の気配を感じたと思ったら腰を抱かれた。酒気を帯びた息が僕の耳元をかすめる。泣いてるんですか？

「なんで、最近、先に寝ちまうの」

少し呂律のまわらない言葉が小さく紡がれるがそれを僕の耳は逃しはせずに聞き取ってくれた。ぎゅう、と腰に回された腕が締まる。

「それは…」

「お前が起きてるうちに帰ってきたいのに、どうやって早く帰ってきてもお前は寝てるし、だから毎日早めて帰るんだけど、いつそのことずつとお前と居たいんだけど、生活費の収入源の一つだし、止めるわけにもいかねえし」

すり寄るように悟浄が僕の肩に額を乗せるから、悟浄の匂いに混じって女性物の香水の香りがして。それだけで体

が反応しそうなぐらいには飢えてる。

「久しぶりに…お前にあったような、気がする」

「そんなわけないでしょ、昼間はずっと顔を合わしてんですから」

「そう、けど…」

「やっぱり声が弱い。泣きそうなんじゃないだろうか。」

「だって、お前…昼間はキスすらしてくれねえじゃん…ものたりねえよ」

火にかけていた鍋の火を一旦消して、悟浄の腕を撫でた。

「悟浄、顔見せて？」

「やだ、絶対情けない顔してる」

「貴方のその顔を見せてほしいんですよ」

物足りないのと、僕と同様に飢えている悟浄は腕を緩めてくれたから僕は振り返って悟浄の頬を両手で包み込んだ。

本当だ。情けない顔をしている。可愛い。普段の気取った表情でも悟空とじやれるような子供じみた顔ではない、本気で拗ねている。その下を向いたままの顔を上げてもらう

べく額にキスをした。そう言えばこういうキスも久しぶり。

「やっと、見せてくれましたね」

今にも泣きそうな、顔で僕の顔を窺い見て。頬が紅潮していて目も潤んでいるからこのまま襲ってしまいたい衝動に駆られているんだけど、もうちょっと堪能したいなあ、とか思つて。

「悟浄、寂しくなつたんですか？」

「……」

「答えてくれなきゃわからないですよ？」

僕の方からも腰を抱いて下半身を密着させるようにする。

「寂しいよ、俺だけがお前の事を一方的に好いてるみたいで、寂しくて、辛くて」

「辛い？」

僕は寂しいとは思ひはしたけれども辛いとは思わなかった。もしかしたら僕はこの人との恋愛に少し冷たいのかもしれない。

「だって、お前は俺に触ってくれねえし、俺の方、みねえし：俺の、事、嫌いになつたんじゃないかって」

涙腺が崩壊寸前なのが解るくらいに目元に涙を浮かべて、唇を戦慄かせて。可愛い。というか少し、反応した。そんなの悟浄にも解つちやつただろう。

「ねえ、悟浄？ 嫌いになつた人に対して勃つほど僕は人を好きではないんですけど、どう思います？」

「：嬉しい、かも」

明らかに羞恥で頬を赤らめた悟浄の頬にキスを散らす。

「僕ね、貴方が帰ってくるたびに襲っちゃいそうなんですよね」

「は？」

「お酒を飲んだ貴方はとても魅力的ですから。毎日でもやりたいくらいなんですけどね、そんなの貴方だけがそうち辛くなっちゃうでしょ？ だからそうならないように、と思つて部屋に引っこんでるんです。あ、引っ込んでるだけで寝てはいないんですけどね？」

バツ、と僕の顔を見た悟浄は寂しいと拗ねた顔ではなく

て怒りで拗ねた表情を僕に見せた。その唇に軽く自分のそれを押し当てる。

「寂しい思いさせちゃったんですねえ…」

「お前…」

今度は怒りで唇を戦慄かせちゃって、可愛い。

「なんだよ…一人で考え込んで、酒なんか自棄になって飲みまくって、そうやって寝てたのに、何だよ…」

「ふふ、嬉しいです」

反応しきった下半身を悟浄に押し当てる。

「てん、め…!!」

「ね、悟浄。ご飯の後でもいいですからやりましょう？」

貴方のしてほしいこと全部してあげますよ？」

「……」

ね、こうしてたら貴方も反応してくれてるじゃないですか。飢えてるのはお互い様でしょう？

ダメ押しでキスをした。ねつとりと唇を舐めあげて重ねて角度を変えて、悟浄が息を喘がせたのを見計らって悟浄の唇を舌でつつく。貴方、これ好きですもんね。飢えた悟

浄は唇を薄く開いて僕の舌を迎え入れる。齒列をなぞって、悟浄のハイライトの味、今日のんできたビールの味を味わう。齒列や齒茎だけしか舐めなかったからか焦れた悟浄は自分から舌を絡める。可愛いなあ。

「ふ…ん、ん」

「ん…」

酸欠で目の前がくらくらするくらいになってようやく離れた僕らはお互いの瞳を見ていた。

「はつかい…飯、いらねえから、もっと、シタイ」

「もっと？　どれくらいもつとしたいんです？」

ガチガチとはまだいかないが完全に反応を示した下半身を悟浄が僕に擦りつける。このままでも、イケそう。

「んっ…お前ので、ナカ、ぐちゃぐちゃにされたい。気持ちよすぎてトぶくらい、いっぱい」

腰を擦り付けるのをやめさせて額にキスをしてあげてから言う。

「悟浄、寝室へ行きましょうか？　いっぱいしてあげますね？」

「ん…」

恥ずかしそうに首を縦に振った悟浄の腰に腕は回したまま歩き出す。

さて、久々の蜜事とでも行きましようか。

【了】

## 自由

### 來花

先ほど、僕が焼いたアップルパイを頬張る悟空が僕を見上げてため息を吐くように不満を漏らした。

「なんで、八戒は、悟浄が女遊びするの許してんの？」

旅の途中で立ち寄った大きな街に数日間も滞在することになった僕らは思い思いの行動に出た。悟浄は悟空が言うように女遊びをしに街へ。三蔵は取れた宿の自室で昼寝をしていることだろう。僕と悟空は、と言えば、悟空にせがまれるがままに作ったアップルパイを持つて数日間、泊まる宿の部屋で二人でおやつの時間と言ったところだろうか。

「なんで、でしょうかねえ…あれが悟浄の息抜きじゃないですか」

そう、僕が彼に拾われてから。その前からの彼の習慣であり息抜きともいえることだろう。

それは、僕が彼の恋人のような立ち位置になっても変わ

ることはなかった。

「ふうん…俺にはあれのどこがいいのかわかんね」

「はは、悟空はそうでしょうねえ」

「寂しく、無いわけ？ 俺ならどこにも行ってほしくはないけどなあ…」

「寂しいですよ？ でも、それがないと悟浄じゃないでしょう？」

もし、彼が女遊びをやめたとしてずっと僕と一緒に居てくれるのなら。それはそれでお互いに息が詰まるだろうし、そんな甘い関係になったつもりもない。

「でも二人つてぶっちゃけやってんじゃない」

「…っ」

悟空の口からそんな言葉を聞くとは思ってなかったのだから仕掛けていた紅茶を吹くところだった。噓せそうになる呼吸を隠しながら苦笑交じりに悟空に言う。

「やってますけどね、そんなのたまに、じゃないですか」

そりゃ僕にだって性欲というものは存在しているのだから抱きたいときはありますよ。それでも、悟浄の体調やら

を考えたりしているから回数は少ないだけで。別に、体の関係なんてなくてもキスとか、抱きしめられればそれで満足しているような現状ですから。

「…なあ、八戒」

「はい」

四分の一ほど残ったアップルパイを目の前にして悟空は先ほどの大人びた空気をどこかにやってしまったらしくよだれを垂らしながら言った。

「これって、三蔵の？」

「ええ、そうですよ？ もっと食べたかったですか？」

「うん」

よく食べる悟空の事だからそれだけで足りると思うってなかったから僕は快くそのアップルパイを三蔵と分けることで持つて行ってもいいということを示したら、悟空は目を輝かせて早速とでもいうように皿を持ち上げて部屋を出て行ってしまった。全部。

まあ、元から悟浄は甘いものが苦手なので計算して作っていないのですけど。

一人きりになった部屋の中で読みかけの小説を開いて続きを辿り始める。

するとすぐに部屋の扉が開かれたので、悟空が何か忘れ物でもしたのかと顔を上げた、ら。

「お帰りなさい、悟浄」

「タダイマ…」

浮かない顔で僕を見ている悟浄を見上げたら、悟浄は拗ねたようにそっぽを向いてしまった。

「八戒ってさ、俺が浮気しても何も言わないよな」

「ええ。だって貴方だって誰かを抱きたいときくらいあるでしょう？」

いつだって僕が悟浄を抱いてきた。悟浄はそれを受け入れてくれるから。

「…抱いてねえよ」

「え？」

「八戒が俺のこと好きだって言ってくれるから俺、すっごく嬉しいのに、八戒ってば束縛してくれねえんだもん。俺が外に遊びにいったって行つてらっしゃって見送るし

さ？」

初耳だ。手にしていた本を机に置き悟浄に近寄る。触れようと伸ばした手から悟浄が逃げた。ものすごく傷ついた顔をして僕から逃げた。ふわふわと舞った紅の髪を捕まえた。

「愛つてさ、好きつてさ、結局わからねえんだもん。そりやなんとなくはわかるけど、ちゃんと俺に分かるように示してくれなきゃ、わかんない」

「貴方はどんな風に愛してほしいんですか？」

僕だって本当は、遊びに行くという悟浄を押し倒してベツドにでも括り付けて逃れられないように捕まえておきたい。手足をもいで僕だけが貴方を支配して、貴方は僕無しじゃ生きられないように、してしまいたい。だけれど、それをするとう貴方は貴方じゃなくなってしまうそうで、僕の良識的な部分がそれを押しとどめてしまつて。でも、僕がどこまで貴方を縛つてもいいのか解らなくて。だから、貴方とは付き合う以前のままの立ち位置なのだろう。

「もつと縛つて。俺が遊びに出掛けに行こうとするたびに

殺されそうなくらいに嫉妬して。俺を離さないで」

「でも：貴方そう言う重いのは」

「重たいくらいのお愛じゃなきゃ、俺はわからない」

僕をまつすぐに見つめる悟浄は縋るような目をしていてた。

思わず髪を引っ張つて痛み顔に顔をしかめた悟浄を抱きしめた。僕のせいで痛みを感じる悟浄のその表情に感情が高ぶる。

「お前の、その顔好き」

そう言つて僕に口づけてきた。

「俺のことだけしか見えてないつて、殺しそうな目して俺だけを見てる。なあ、普段もそれくらい」

「束縛、して欲しいんです？」

「うん」

些細なことでもいいのかもしれない。悟浄が言う「殺されそうな目」をしている僕を見つめる悟浄はうつとりと表情を蕩けさせている。

「じゃあ、悟浄。今日はもう、この部屋から出してあげま

さんから

「うん」

これから何をされてどんな理由で部屋から出られなくなるのかをわかっている悟浄は嬉しそうに微笑んで僕に口づけた。

(結局、自由って何？)

【了】



それは、唐突に思い出した。

清一色が出てきて色々どごたどごたしていたけれども、その清一色と会った町での事だ。僕自身、八百嵐さんと手合せしていたからあまりよく見えなかったし聞こえなかったのだけれども、あの時に悟浄と手合せしていた男は。

「ねえ、悟浄」

「なによ」

外は雨ふりでまだ吹っ切れたわけじゃ無いけど、まあ塞ぎこむほどではなくってきているので宿のベッドに不貞腐れている悟浄の髪を軽く引っ張ってみたりした。

「ちよつと前の：ほら、紅孩児の妹のあの子に会った町であつた人って」

「：ああ、兄貴だよ」

「やっぱり」

まだ、長安のあの家にいた頃に悟浄が話してくれた悟浄

のお兄さんの爾燕さん、だったか。ずっと探してた人と会えたんだなー、と思う反面でまさか敵同士になろうとは思ふ。

「苦しくないです？」

「なにが？」

「いえ、お兄さんが敵サイドにいるので」

枕に顔を埋めて寝ているのか起きているのか解らなかつた悟浄が仰向けになる。そんな悟浄をベッドの端に顎を乗せつつ観察してみた。

「別に。生きてるってわかっただけでもいいし」

不意に僕の方に転がって何を考えるでもなく僕にそう言った。

「それに、他人の生き様をどうのこうのって口出すようなマネはしねえし？」

見つめあつて、それが本心であることを知る。とりあえず悟浄はこの旅においての目標ではないがちよつとした寄り道を終えてしまっているわけである。

「あ、ちなみにあいつ今は独角兕って名乗ってるらしい

ぜ」

「へえ」

そして、訪れる沈黙。お互いの顔を見つめあって、でも野郎の顔だから見つめてもどうかと思つて苦し紛れに話題を出した。

「お兄ちゃんとかつて呼んでた時期つてあるんですか？」

そう言つたら面食らつたように驚いて、そして赤くなつてそつぽを向かれた。そつぽを向いてくれて気まずさが減つたのだが、その反応つて…。

「え、本当にあつたんですか？」

「……あつたつーの、ありましたともさ、それが何か？」

「いや…意外でしたので」

元々、雨降りで外に呑みに行けなくなつて不貞腐れていた悟浄がさらに拗ねてしまった。うん、可愛い。

「どうして兄貴つて呼ぶようになったんですか？」

「聞きたいの？」

「ええ、施設には年上の子どもはいましたけどあんまり名

前とか人を指す言葉つて使いませんでしたし…そういうのつてなんか新鮮なんですよねえ…ほら、花喃も名前呼びでしたし」

誰か、親しい人をそう言つた人称で呼ぶことはなかった。大抵が「貴方」か名前で呼ぶことが多かったから。これからもそうやって親しい間柄の人を呼ぶことはないだろうから。

「…ちつせえころは、兄ちゃんつて呼んでただけだよ？」

昔の事を思い出しているからだろうか、悟浄の視線は虚空を見つめていて。ああ、もしかしたら僕は彼に昔の辛いことまで思い出させているんじゃないだろうか？

「昼間は一緒に遊んでくれる奴らがいたからさ、そいつらと遊んで義母親から身を守つたりしてたんだよ。そしたら日が暮れるころに兄貴が迎えに来てくれるワケ。で、ガキつてすぐに人のこと呼ぶじゃん？」

「まあ…」

「兄ちゃん、つて呼んだらそんな時一緒に遊んでた所謂、ガ

キ大将みてえな奴が俺を笑ったんだっただけかな？　まともに覚えてやしねえけど」

小さい頃の記憶は曖昧になりがちだ。きっと死ぬ頃には覚えてもないんだろう。

『まだ、兄貴のこと兄ちゃんって呼んでのかよ』ってな感じに笑われて、その次の日から兄貴って呼び始めた」

「へえ」

そうやって呼ぶ人がいない僕なんかは愛称がそんなもんでコロナ変わるものなのかと、思った。

「聞いたってそれだけだよ」

「まあ、聞いても僕には実感わきませんから」

「ちなみに兄貴は兄ちゃん呼びが気に入っていたらしく、結構ショックだったみたいだな」

「ふうん…」

あ、そうだ。

「じゃあ、僕の誕生日が来て僕が年上になったらお兄ちゃんって呼んでもいいですよ」

「誰が呼ぶかボケ」

くすくす笑いながら冗談交じりに行ってみた言葉に悟浄は呆れながらも返してくれる。

「大体、同い年だろうが」

「えー、いいじゃないですかあ。そうやって呼ばれてみたんです」

ベッドに肘をついてくすくす笑い合ってたさげなくキスをした。ほんとにじやれるようなキス。

悟浄が僕の頬に触れて撫でていくのに誘われてベッドに乗り上げて悟浄を見下ろした。悟浄にお兄ちゃんなんて呼ばれたら僕、吹き出しちゃいそうだなあ。

なんて思いながらも一度キスをした。

（あ、兄弟プレイって燃えませんか？）

（燃えねえよ、バカ）

【了】

## 執筆者コメント

○アオノミズホ

八浄webアンソロジー企画公開おめでとうございます！

似たもの同士の信頼関係に基づいた友情と、うん？それもはや友情じゃなくね？みたいなものが混ざった八浄が好きです。

参加できて楽しかったです、ありがとうございました！

○秋陽

企画に参加させて頂きありがとうございます。八戒に煙草を吸わせたくてこれを書きました。優しくすぎて貧乏くじひく悟浄と、考えすぎてどツボにはまる八戒が好きです。互いに少しだけ依存してればいいなと妄想してます。

次回は悟浄よりの視点で続きかな？つてのを書きます。

○かめやま禪

お読みいただきありがとうございます。かめやま禪と申します。八と浄は左右どちらも行ける人ですが、やはり八攻めは素敵：そんな気持ちを詰め込んだら、ありがちな方向に暗くなりました。テーマが良く分からないのは、最初にGREENで思いついたのがお茶だからです。

○KUKO

初めてアンソロジーに参加させて頂きます。何でそうなるんだい八戒さん、と突っ込んで頂ければ幸いです。CRIMSONではこの続きを書くつもりです。きつとバカッブルになっっているはずなんですが、書けるかどうか。アンソロジーということで、一人浮いているなんてことがないことを祈るばかりです。

○しまし

初めまして、しましと申します！こんなステキな企画に参加できたことを大変！嬉しく思います！なので各方面に感謝の五体投地キめてそのまま寝ます。おやすみなさい。皆さん良い八浄ライフを。

○千代崎

手持ちの携帯でWordファイルを閲覧できることを二年以上知らなかった非現代人です。数々の八浄を戴きどの方角にも足を向けられないので暫く立って寝ます。

次回はタイトルやテーマが今回のと対になるとかならないとか。

宜しければもう少しお付き合い下さい！

○とうみさな

chill out

落ち着く、くつろぐの意味があります。

最遊記の雰囲気からスラングを使いました。

緑要素少なかつたらごめんなさい……。

お読みいただきありがとうございます。

○もちみ

初めまして、もちみと申します。

今回の企画におきましては、HPや支部で頻繁にお見掛けするような方々とご一緒することができ、誠に恐縮ながら狂喜乱舞しております。

拙い文章ではありますが八浄愛だけは込めたのでお目汚しにどうぞ。八浄を語るのは文字制限のないところでまた……ということ。

○悠汰

底辺ながら参加させて頂きました、ありがとうございます。  
これを機に、八浄の輪がもつともつと広がると嬉しいです。

○來花

初めまして、樂來花と申します。 85（リバ有）で八戒と  
悟浄を愛しています。

ほのぼのは苦手なので鬱いお話しか書けませんどうぞ  
よろしく願います。



**『85 Anthology -Ivied Ruby- Side:GREEN』**

2014 年 9 月 21 日発行

Ivied Ruby（代表：千代崎朱）

[chiyo858ktk@gmail.com](mailto:chiyo858ktk@gmail.com)



